

平成 22 年 5 月 6 日現在

研究種目：「基盤研究 (C)」

研究期間：平成 19 年度 ~ 平成 22 年度

課題番号：19520256

研究課題名(和文) 21世紀ケルト性の再生と対イングランド関係

研究課題名(英文) Resurgence of Celticism (Celticity)
in the 21st Century and its Relationship to England

研究代表者

水之江 郁子 (MIZUNOE IKUKO)

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：40229711

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、アイルランド文学、ケルト文化、アイルランド女性史

1. 研究計画の概要

ヨーロッパの周縁ケルト文化圏が、EUの弱小国・地域支援と相俟って活性化し、文化的鎖国状態が続いたアイルランドも、特に文学的領域において目覚ましい展開を見せている。その成果を通して、ケルト性が未来に向けて発信しているものを汲み取り、主流イングランド文化に対して見せるスタンスを探ることを目標とし、以下のように計画を進めた。

(1) イースター蜂起前後の女性たちを、コンスタンス・マーキヴィッチを中心に研究し、対イングランド意識を含めた「ケルト的」女性の生き方を追う。

(2) コンスタンスを初めとして、アイルランドとイングランドの狭間に生きたアセンダンシー階級の研究を通して、相互の意識と問題を知る。

(3) 近年活躍する作家たちセバスチャン・バリー、ジョン・マッケナ等を読み、彼らが描くアイルランド女性像から、ケルト性を示す生き方を探る。

(4) 英語文学圏で再評価が進むエリザベス・ボウエンを、アセンダンシーの代表と見做し、アイルランド女性とイングランド女性の特徴を併せ持つ点に注目、作家として、一女性として、その生涯を読み解き、上記ケルト性と関連付けて、総合的考察を加える。

2. 研究の進捗状況

アイルランドにおけるケルト性を掘り起こしたグレゴリー夫人や W. B. イエイツ、レノックス・ロビンソンなどを含む 20 世紀初頭ダブリンに現れた文学史上に名を残す群像を振り返るところから出発、イングランド

とアイルランドとの狭間に生きるアセンダンシー階級のコンスタンス・マーキヴィッチを研究して、イースター蜂起前後の女性たちの活躍に表象される生き方に触発された。そして、最近ようやく熱意をもって研究対象と見做されるようになったアイルランド女性史が、女性たちのケルト性を明らかにしていきつつある状況を知ることになった。

一方、以前から研究対象としていた現代アイルランド作家たち、とくにジョン・マクガハン、セバスチャン・バリー、ジョン・マッケナ等の作品を読み、比較し、そこに描かれた現代女性たちを考察することも必須のことであった。マッケナは、研究を纏める段階で、アイルランドの知人である研究者を通して、作家本人とも連絡をとることになり、2009 年夏発売と同時に話題を呼んだ最新作についても情報を得るとともに、さまざまな質問に答えてもらい、9月の学会での研究発表に臨むことができた。

その後、アイルランドの新しい女性たちの生き方を見た上で、もう一度アセンダンシーの作家として著名なエリザベス・ボウエンを採り上げることになった。2008 年に出版された書簡・日記を初めとして、新たな研究書や著作集も出て、作家として再評価の緒に就いた感があるが、この研究の最終年の纏めとしては、あくまでもイングランドとアイルランドとの関係をボウエンがどのように理解していたか、それが現代アイルランド女性の感覚と、どのように結びつくかを、「ケルト性」という観点を縦軸に考察してみたいと予定している。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

昨今の大学における雑務の忙しさ、研究時間の確保の難しさ等で、決して意図した通りに進展しているとは言えないが、しかし、何とかと評価しても許されるかと思う。年一回の現地の学会研究発表、または論文執筆を行ってきたので、多くの海外の研究者及び研究対象の作家との交流も実現したし、研究の成果に対する評価も実感することができた。

4. 今後の研究の推進方策

リーマンショック以降の経済破綻は、文化活動への影響も計り知れず、当初認められたケルト圏の活発な文化活動は沈静化せざるを得ないように見受けられる。関連学会の開催も難しい面があるようだ。しかし、文学に限ってみれば、衰えを感じることはない。

上述したように、ボウエンの新しい資料を読み解き、現代における意義を考察したい。それを通して、本来意図した研究目的に近い成果を出すように努力するつもりである。

今年度より学部長という職務に就き、今まで以上に本務校における忙しさが増すため、どこまで成し遂げられるか不安もあるが、現時点では精一杯努力することを決意することしかできない。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

水之江郁子「コンスタンス・マーキヴィッチ その表象と記憶」『共立国際研究』No26 pp.75-99、2009、査読無

[学会発表](計2件)

Ikuko Mizunoe, "Resilient and Facing their Realities: Women in the Works of John MacKenna," 'Changes in Contemporary Ireland: Texts and Contexts' 12th September 2009, Loughborough University (England)

Ikuko Mizunoe, "Something to Live for or Something to Die for: Constance Markievicz and What She Represented" 'Ireland: At War and Peace' 9th November 2007, University of Sunderland(England)